




 昔語質屋
 庫卷之五
 初篇



柳村
 卯十
 抄
 稿

特別
 ^ 13
 982
 5



門 へ 13
號 982
卷 5

昔語質屋庫卷之五

東都

曲亭馬

琴



第十

紀名虎錦の擯鼻禪



叔子の迹あとのあと。身みの幅ひろさ二尺五六寸。長ながさ一丈有餘あまり。いとも比ひ太たく遅おそく。大おほ錦にしんの禪ぜん襠たう垂たれたる厚あつ總そう熾しまご。わたりを拂はらふ意い氣き揚あげ。現げん古この最もとも。稱なづ噴ふんせ。當あ下げ錦にしんの擯へ鼻び禪ぜん。獨ひとり角かく觥かうの向むかひ。大おほ人ひと氣きも。吾われ仁にん明めい帝ていの。御ご叙じよ氏し主しゅを。氏し長ちやうが禪ぜん襠たうま。紀き名な虎この名なを。負おし。傳でん來らい帖てい。物もの々々。怒おこる。詩し。

門 へ 10
號 982
卷 5

惟喬惟仁兩皇子位を争ひあひつゝ大臣を定めり。あはく角觥の勝
 負よりして即位のべし。とまじりて朝議す。一決を以て兄弟の皇子
 互ふ力士を以て勝負を争ひあひつ。惟仁親王の相撲人晴幸は勝り
 ちれば三司百官惟仁を王位に即せり。清和天皇とあらはれり。或は
 惟仁親王のらん方なり。孔雀三郎業平との美男の競は譽力あり。野見
 宿禰も勝るを以て。又惟喬親王の外祖父紀名虎を以て。彼
 業平は番人。名虎もは力士あり。天命の所よりありけん。
 名虎が虎の勢ひも孔雀の雌虎に匹敵せり。あはくも負よりけん。
 王位忽ち定りて。才皇子の移ひ。兄皇子の患ひあり。名虎の遺恨を
 以て。自殺し。そのまじり。惟喬も世を慕はる。墨の衣は空をうへ。

の扉に入ると。あはくと作て。設く小説傳奇を。そのまじり。傳未書。あは
 くそのまじり。紀名虎が晴幸と結び。抗鼻禪あり。とて弄賣る。傍痛さ。我
 々のまじり。門を根継と。名をひ。り。大力士伴氏長が像見あり。彼王位を争
 ひ。名虎朝臣の名は高く。世俗のあはく小説。あはく。あはく。あはく。あはく。
 角觥。とて。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。
 されば。世のあはく。東宮定ち。惟喬惟仁の確執。このあはく。由る。あはく。あはく。あはく。
 あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。
 もあはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。
 即位のまじり。親。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。
 数尋。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。
 等四。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。あはく。
 母は太皇太后。藤原氏太政大臣。贈正一位。良房朝臣の



名席

孔雀

傳奇の鹿錯紀名席と孔雀三郎業平と角舩の如

女あり。嘉祥三年歲在庚午三月廿五日癸卯。天皇を太政大臣の東の
京の一條の茅小生の人。十月廿五日戊戌。皇太子とす。誕生
九月のあつちをあり。是よりされ童竊あり。大枝平起天。走超天。騰
躍止利超天。我那護田。阿志。食無志。岐那。雄。伊志。岐那
とぞ謡ひたり。藏者ゆりらく。大枝の大兄をいりあり。この時文徳天
皇。四皇子をり。まゝ第一惟喬親王。第二惟條親王。第三惟
彦親王。皇太子。惟。これ第四皇子をり。天意りのどく。あふ二兄を
超るまの故。超の謡めり。とんえり。夫即位の國の大事あり。天命
その君をゆり小あり。人力のうとるあふららど。あふ係を纏頭祿物
小等。相摸の勝負。任とらめあらん。その正史を見て。彼小説を思
ふべ。惟喬惟仁の位あら。この絶てあふ。第一の出證あり。

一書小情和のめん書けらねたる條よこれ等のいふの東宮

あらまひりつりんもこのいふとそあはゆれと記されし一切のゆかり

も亦ある物と惟喬親王の位事ひは文徳天皇の天安元年の月二日

ありとたりと書記したり。是より八年己前嘉祥三年の十月小惟

仁親王東宮小立あひたる。惟喬親王の何のあふ正るゆありとひを云

あめがたにらひ絶て論を不足らんと又実録卷の廿六 第十卷 貞観十六年

九月廿六日丙午の條よ無品惟喬親王封百戸を益ありと見えたり。

その勅よ朕が庶兄惟高親王の先皇の鍾愛たあへ不あり。朕が友

于を相厚あらんと敬と云又宣く骨肉天至遂に跡を殊よとを

りて跌り。緇素道分て仍歎顔を以恨とて親王爵邑を讓

還との同。朕親王の平昔家途省素成りて唯縣官小仰て分

衛とてふららご。おりの資育館よ足るもあも妨す。高情と侍らんと

を懐きていまご敢遠分て今果よ夫屢空の事をましく悲悵侍てふ

へあらば宜彼舊封を全し。その百戸を返して衣衾の費を助て朕が惻

然の懐を慰むべし。制とてそのりのあひと見えたり。あて同年の冬十月八日

癸酉よ惟高親王表を上りて百戸の封を辞しあひら亦懇よ勅答

ありと許しあひららう。同書のある巻よ見えたり。それらよりて天皇と

惟喬親王と莫逆よとせりまをとるべし。まを位あらまひんとし

ゆと衣を被せまじあひらる人の口よとありあれ是より先惟喬親王

貞観十四年秋七月一日己卯疾よ寝て出家入道とあひし。

小野の閑居とあひらる小野親王と稱しあひら世を憤りて

家とあひら病よとて沙門とありあひらが性なり閑雅を好む。

名刺と疎く。よろづ質素小きりまきりぬ。古書のうら推量らる。又清和天皇降誕まじく。僅九ヶ月が程小東宮小立ありしゆ。おん母太政大臣良の女も。嫡子ありしをいさまふご。又惟喬親王の文徳第一の皇太子小立りませむも皇太子よまられざりし。おん母正四位下紀朝臣名亮が女も。廢子ありしが。これ惟喬のあん母の有常の妹と名を靜子と云ふは。この腹は惟喬親王と加茂の香宮を産しぬ。又彼紀名亮朝臣の仁明天皇の養和十四年。乙未。まじりて四年を産す。加祥三年。乙未。惟喬親王誕生。まじりたり。おん母惟喬親王の王位あらし。この相撲人。名亮をいふれ。と作じ。乙未。代不都合る。物語あらざや。又惟仁親王のあり。孔雀二郎業平と。りか力士をいふれ。と作じ。傳奇の作者が滑野。白亮。末崔の對をとたりたり。文徳清和のあんと。後々の相撲のむと。

皇代通記
 孝天皇四
 子あり直
 子あり直
 子あり直
 惟喬親王
 の第二女
 とその下
 高の女と
 はした

緋号たるは。これ小業平の名を負じ。在原の中得の紀有常。防権。孝。元慶元年。丁酉。乙未。交加。歌。正月廿二日。卒。年六十三。あか。伊勢物語。小。え。ゆ。れ。有常の父の名亮と。業平をいふ。一番の相撲人。亦。つ。後。の。世。武藏。烟。葛。飾。の。ほ。り。小。業。平。と。い。ふ。相。撲。人。あり。り。を。それ。が。住。り。り。の。橋。を。業。平。橋。と。唱。え。り。土。俗。の。説。は。因。り。て。孔雀。の。對。業。平。と。名。づ。け。たり。との。相。撲。の。む。と。傳。奇。の。作者。が。筆。を。い。ふ。れ。惟。喬。親。王。の。東。宮。わ。ら。し。ひ。の。り。の。當。時。の。巷。説。あり。し。江。抄。第。二。小。天。女。白。皇。帝。徳。寶。位。を。惟。高。親。王。小。讓。ら。し。の。志。あり。太。政。大。臣。忠。仁。公。の。摠。て。天。下。の。政。を。撰。て。第一。の。臣。たり。憚。り。口。より。物。さ。ぬ。の。間。漸。數。月。を。経。り。云。或。の。神。祇。を。祈。請。し。又。秘。法。を。修。て。佛。力。を。祈。れ。し。真。淨。僧。正。小。野。親。王。の。祈。師。あり。真。雅。僧。都。る。

東宮の護持僧たり。其上原本の漢、これらの説より、王位あらたむと云ふ事は出ま

り。故に、真濟、真雅の両僧を名虎、業平は志るるや、ありのよ、貞觀の

勅書、小朕が庶兄、惟喬親王の先皇の鍾愛、あめあらず。と宣へ世を推

量するも、この親王の御年、由長ありて、殊に帝の寵愛、あまざり。と

世の人多く、宝位の君を譲らせあり。と云ひ、なりたるよ、あひの、

惟仁親王誕生、まじく、僅九ヶ月が程、又東宮よりあり、いられ、人の口さ

るて、よめ、ぬ、浮説もあせり。あつても、いふも、推量の説られ、惟喬親

王のいふより、多し、棄んとは、おぼしき。あつても、あり、も、あつて、いふ、

え、ても、あらん、とも、が、主となつたり、氏長、わの、の、の、二代、実録、巻の、四十九

の、十五、張、よ、え、え、え、り、。実録、仁壽、二年、の、條、より、五月、廿八日、丙午、前、周、防守

後、五位、下、紀、朝、臣、安、雄、卒、。安、雄、の、大、京、の、入、助、教、後、五位、下、種、継、が、ま、り、

仁明天皇、経術を崇め、以て、屢、儒者、を、見、前、より、引、て、論、難、せ、り、。あ、ひ、れ

時、御、躬、宿、禰、氏、主、の、大、学、博、士、たり、。種、継、の、助、教、より、。天、皇、兩、人、を、喚、

り、。経、義、を、論、じ、ゆ、め、あ、り、。氏、主、礼、を、執、り、。種、継、の、傳、を、奉、ぐ、。進、修、性

復、り、。折、角、を、と、り、。この、時、小、當、て、豫、力、之、士、左、近、衛、門、下、根、継、右、近

衛、門、伴、氏、長、並、に、相、撲、の、最、子、ゆ、り、。天、下、を、雙、た、り、。帝、氏、主、を、喚、く、氏、長

と、種、継、を、根、継、と、り、。り、て、これ、は、我、も、あ、ひ、ぬ、と、云、え、たり、。ゆ、れ、が、紀、種、継

が、學、問、の、力、を、カ、シ、根、継、は、は、あ、ひ、。帝、の、あ、ん、我、を、あ、ひ、。り、。紀、名、虎、が、相、撲

の、ゆ、を、い、ふ、ま、抑、み、が、ら、ひ、中、の、ら、ん、ゆ、り、。吹、夫、街、談、巷、説、と、り、。必、又

母、あ、り、。この、出、處、を、問、う、り、。彼、巧、拙、を、批、評、せ、ん、の、送、恨、の、ゆ、り、。又、實、録、卷、の、五

十、の、廿、七、張、仁、和、三、年、秋、七、月、廿、七、日、戊、戌、の、條、より、天、皇、紫、宸、殿、小、御、より、

左右、の、相、撲、人、の、體、骨、強、弱、の、秋、を、聞、覽、し、。其、の、後、擇、抜、て、其、の、名、を、唱、

小静か母より佛より加賀國より王京のありてある白拍子にて平相國小思

り後子飽きて尼となりて千手平重衡の囚きて鎌倉小寺にて程鎌

倉殿の仰よりと衆を感たりと重衡終不謀せられぬとすく

悲に歎きかぐ尼とあらまうせり物おひのありぬれがけ程ありむ

ありありぬ東鑑文治四年三月廿五日の條云々今聖の手前平重衡廿四云々

世の人の並びとあるものからあひく操貞く見裁をさす男よ

も恥さるる妻よりあらぬれど過せありて飾も被さるる尼となりて生

涯行ひとま。我を身を殺し夫を仏道へ引接も仏縁ありぬ

あれぬ世へ入れと緇早まう。法衣とりて袈裟といひ禪師といひ佛とい

千手といひ一又一説よ衣河の磯禪師が好む仏と袈裟の後才女

ありといひと。牽強附會の言あるべし。亦物の五人の白拍子か母の

実名ありぬべけれど袈裟の前の名を東といひは盛衰記よ載るる母の

更よ考る所ゆくとされぬその烈苦節も自餘四人よりまう。数百年の

の今よりと。この物語をすくぬの得を流さるる母のあり身を汚し

夫小代して死し。僅二八の秋ぬれぬもその名の今小滅びて現身を殺して

仁をあらぬの命長しとるのひん理も稱ひていと有がけた才女は母も亦

被盛速入道文覚へえま渡邊薫よて遠藤左近將監盛光が一男。

上西門院の北面の小葛ありぬ彼は長谷寺の観音の祈子あるがその母丸

の袖へ着の羽をぬると夢えと懐妊して文覚を生みぬ父は六十一母は四

十三より奉たる一子とぞ。さあくらよ。母く父母を喪ひて丹波保津の

莊のヤ司春木二郎入道道善といふのよ養生成長隨子鉄面牛皮

の童あましく公あぶとく声高し。親の教訓をも聴く他。他。制止をも用と

道善も持酔する折彼が一族小遠孫二郎瀧口の遠光とよりの字ひ
 しく元服す。父盛光の盛の字と鳥帽子親の遠光が遠の字
 を合して盛遠と名告らせ父の跡を踏みて上西門院の北面は春ら
 ぶ遠孫武者盛遠とぞ召れる。武藝は久し傳是よりなるが道が
 も又ありあし十七歳の年不慮の悪行いよつて却世殺か。忽地佛道
 小入てり。盛妻記巻十八は。盛遠が道公の縁故を尋ねば源渡が妻の母
 所云の盛遠が伯母なり。伯母我の妹は作の良の伯母のあたるを
 一年度の橋供養の日もくこそあゆも。渡が妻安寝を眷恋て思ひ忘れんとされ
 ども忘れんれど九月十三日の朝まゝ小母の衣河が許しおれた。天庭
 小刀を引抜つ。左も胸前とて刺んとする程は衣河の生たる公持
 もぞく。そのものいりよ。とあそくそのれを同一く盛遠答て。安寝御前

をわが妻よせんと思ひたる。渡は棄てて。三年が程送恨きり。は
 牙詮歌と一所よ死にとあみく。そのま衣河の口頭とられてせんまをま
 らど。その命の惜みれば。おまが放ちあへ。今宵女思を嘆びいそ。とも
 ちもあそ。かんは随いゆるべ。と。盛遠の懇口を堅めあわうりな
 ん。と。思ひて渡よりつらむ。とのたまたつ。その夜を契として。ぬりあし。中
 衣河の破頂は消息書あつて。安寝御前を嘆び。盛遠が存体
 を。かちあそ。ゆえ。彼が思ひの晴ざらん。そのを放る。たそ
 ち。前が。より。母を殺し。あそ。ほ。は。女。思。は。あ。そ。も。
 拘る。れ。と。限。ら。れ。ば。あ。し。や。ら。へ。母。を。ひ。慰。め。る。と。ど。も。月。も。既。は
 暮。ま。れ。ば。盛。遠。は。や。あ。ま。り。女。も。小。卧。ま。り。中。て。鶏。明。曉。を。告
 小。ん。ば。装。束。の。起。別。んと。さ。盛。遠。の。袂。を。引。と。め。會。の。遠。小。あ

まねべ。會(あひまひ)のちひをうつてん。和(わ)前(まへ)の不祥(ふせう)ハ盡(じん)をが不祥(ふせう)。盡(じん)をが不祥(ふせう)。盡(じん)をが不祥(ふせう)。

祥(しやう)の度(た)が不祥(ふせう)。二(に)つの不祥(ふせう)が一度(いちど)も未(いま)べた宿業(しゆくごう)も。そのまらめと思(おも)ひたる。

氣(け)色(いろ)もれば髪(かみ)油(あぶら)のちりうら業(ごう)あつて。めんひも。宿(しゆく)業(ごう)も。そのまらめと思(おも)ひたる。

酒(さけ)を強(かみ)く。醉(まひ)臥(ふ)す。竹(たけ)系(けい)

へ。樓(りう)臥(ふ)して。髪(かみ)を搜(さが)す。叔(しやく)一(いつ)と。信(まこと)今(いま)小(こ)密(み)語(ご)ハ。盡(じん)遠(えん)

の状(じやう)で。未(いま)夜(よ)討(うち)の支(し)度(た)うら。わけてその夜(よ)渡(た)か。ちよ。志(こころ)のび入(い)る。

樽(たる)小(こ)のぼろくたれ。れは枕(まくら)辺(へ)の烏(く)帽(ぼう)ををらた帳(ちやう)蓋(がい)了(りやう)。卧(ふ)す。そのあま

る。ほ探(たづ)り小(こ)指(さし)も。ぎ。濡(ぬ)る。髪(かみ)を搜(さが)す。あて。只(ただ)一(いつ)刀(たう)は首(くび)を切(き)ら。て。

袖(そで)は裏(うら)も。て。竊(かす)や。は。舊(ふる)の処(ところ)より。支(し)出(で)か。天(あま)も。り。あ。は。帰(かへ)る。い。ま。ば。

渡(た)が首(くび)の。あ。ら。ど。あ。て。叔(しやく)ぢ。の。髪(かみ)油(あぶら)を。り。を。め。無(む)悲(ひ)だ。この女(よめ)が。夫(つま)

の命(いのち)の。代(か)り。た。ま。も。と。ら。め。と。曉(あ)て。ゆ。づ。慚(あは)れ。愧(は)い。郎(らう)堂(だう)俱(こ)に。忙(いそ)が。渡(た)

が。必(かな)ま。り。ゆ。け。バ。門(かど)戸(こ)を。閉(と)ろ。い。音(ね)も。ぞ。盛(さか)遠(えん)未(いま)ま。ら。う。と。奥(おく)に。バ。内(うち)

答(こた)て。面(おも)目(め)の。あ。れ。の。ゆ。へ。向(む)後(ご)入(い)る。ま。の。見(み)糸(いと)に。に。と。の。み。盡(じん)遠(えん)な。ま。ら。う。と。あ。ま。

とも女房(にようぼう)の。あ。ん。首(くび)を。切(き)ら。ぬ。奴(やつ)を。笑(わら)ゆ。て。搦(な)捕(と)て。糸(いと)を。り。つ。は。て。し。門(かど)を。閉(と)

け。あ。て。の。ゆ。に。歎(なげ)か。た。の。中(なか)も。嬉(うれ)し。い。て。門(かど)を。閉(と)ろ。い。れ。ゆ。ら。り。そ。の。ゆ。え。盡(じん)

の。首(くび)も。あ。ま。の。女房(にようぼう)の。傍(そば)に。臥(ふ)き。り。り。渡(た)を。対(たい)ひ。て。腰(こし)刀(たう)を。脱(だ)す。を。伸(の)

す。又(また)髪(かみ)油(あぶら)御前(ごぜん)が。首(くび)を。切(き)ら。す。身(み)の。惡(あく)業(ごう)人(ひと)と。な。り。首(くび)尾(び)を。赤(あか)

を。ぬ。る。も。匿(かく)さ。び。告(つ)告(つ)。す。と。の。ゆ。あ。ま。り。ふ。か。憂(うれ)し。い。れ。ば。自(じ)害(がい)せ。ん。と。思(おも)ひ。ま。ら。

なく。の。み。迎(むか)ひ。の。ま。の。ゆ。え。と。死(し)ん。と。を。ま。ら。う。あり。と。の。ゆ。あ。つ。て。頭(かぶ)を。伸(の)

居(い)ら。り。ま。ら。る。度(た)の。あ。ま。の。び。髪(かみ)油(あぶら)を。ぬ。る。も。刀(たう)の。持(も)た。れ。ん。入(い)の。刀(たう)の。あ。ら。り。さ。

お。ら。び。や。の。み。迎(むか)ひ。を。殺(ころ)す。ま。ら。う。と。死(し)ら。う。妻(つま)の。活(いき)ら。ま。あ。ら。り。さ。あ。ら。り。さ。

識(し)よ。に。を。め。ら。う。め。それ。も。の。み。迎(むか)ひ。も。あ。れ。人(ひと)の。お。小(こ)世(よ)を。捨(す)て。来(き)世(よ)の。苦(くる)難(なん)を。

遠藤氏者盛遠



源左衛門尉

源左衛門尉



吊んまをこ刀を引抜て。さうら髪を切るとんば盛遠の渡を七度礼拜
 してこれも頭髪切てり。さて袈裟の前が送書手画の中より。その
 ときふふ深れ浅茅が原より送ふ身のり。暗路より入りてり。き
 母のれを被え。目もれ。消泣か。涙の隙より。商路
 中も。迷ひて。蓮生より。あはれ。身をり。せん。髪を落髪して。尼と
 あり。天王寺へ。念新しく。法生の素懐を。遂さう。あへ。祈念する。行ふ。
 次の年十月八日。四十五歳。く。め。往生を。遂より。た。新門村
 渡の僧を。請と。受戒して。渡阿弥陀佛と号し。遠藤武者も。入道
 して。盛阿弥陀佛と号し。夫の女の屍を。後園より。葬して。墓を。築。其の年の
 間。行道念仏。斜る。吊ひ。る。も。さ。ん。ば。や。夢。墓所の上より。蓮
 花開き。袈裟精。其の上より。生。り。て。その。後。盛阿弥陀佛。日本

國を修行して。求法の志。いと。苦なり。遂に。智者より。より。れ。盛阿弥
 陀佛を。改めて。文覚と。号し。利根。聰明。有り。有。驗。世に。務。れた。り。
 知法。劫。驗の時。ま。昔の。女の。み。成。ひ。ゆ。常。衣の。袖を。絞。り。
 り。や。慰。む。と。彼。女の。涙。を。拭。く。本。き。と。き。頭。を。て。恋。れ。時。も。
 ら。れ。を。見。悲。れ。も。を。辱。れ。を。せ。り。の。と。妻。あ。れ。盛妻記。卷。の。後。
 高尾神護寺の。ぼ。り。住。り。同書。卷。の。一。條。の。物。り。當。時。
 の。小。説。り。疑。ら。盛。遠。渡。か。出。家。の。り。衣。阿。袈。裟。の。各。々。作。設。
 する。欽。又。衣。阿。袈。裟。の。名。も。盛。遠。渡。か。出。家。の。物。語。を。附。倍。る。欽。志。
 くれ。も。既。に。故。り。ふ。り。れ。を。有。つ。る。り。て。許。せん。渡。の。妻。の
 貞。み。の。實。も。貞。み。の。惜。り。死。む。る。と。の。一。日。お。り。て。その。身。分。盡
 遠。小。侍。な。り。千。載。の。送。恨。は。ゆ。り。忠。臣。の。死。を。も。草。命。成。る。と。

神操 野探 忠礼 也謹法 云好麻 自好麻 若節 易經節 卦云節 貴適中 過則若 能

烈女の死ともその身を汚さるべし。ふりてこれを節操といふぞ。苦節
とのゝのるゝ。あつた後の入りの物器は因りて鳥羽の恋塚の渡が妻の古墳
ありては。是を否とあらざるに。操塚とほめて恋塚。恋慕の妻と
す。これを恋塚と唱ふる。その室は稱ひ侍り。鳥羽の山城。紀伊郡あり。
伊勢名。秋女鳥羽田と詠ふ。多志の松林の事をこく。用も羽田の早苗まじく。後京
衣うつこ後。上鳥羽の北山塚といひあり。恋塚もその一なり。たけに。件の恋
塚の徳藏堂の南路。傷東のくまの。池の中あり。一書に。恋塚といひあり。
二所ありて決。あし。今より塚の遠孫武者が築く所あり。そりく。そ
る。比廣大うと。あうりたる。鯉ありたり。住と久まふ。既又神通をなす。
種く奇怪をなす。あふ土人駈捕てを滅び。あらざる。その美の祟を
る。ををををを。池の底に納めて。墳を築けり。鯉塚といひあり。

治兼のも ねのるあ 伊豆國 流るん奈 古屋寺は 流るん奈 かねてい流 かんき

ら。信が。唐山の書は。安南龍門の負の龍とある。うへんえれど。
既又神通をなす。鯉の土人打殺され。いふ。うへんえれど。信鯉塚を
王といふ。も。あつた縁故あり。さても渡の嵯峨の流を汲る。源氏に
あつた女房の枉死を哀慕し。子孫の後葉をせむ。とて。いふ。こつた
身の桑門といひ。みみ。みみ。あつた。男子の公。あつた。いひは
ら。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
いひは。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

上鳥羽の北山塚

止ぬべきは又六代よきめき。世を覆えんと謀じり。半表半裏
 なる出家人の行状は似ど俗人といふとどきもいと罪多し所ありあらん
 袈裟の前の画像を奉る仏とも頭より。諸國を修行し。恋し
 とれあれんを悲しん時。これに平ひ。と盛衰記よるを所実言
 ろ。煩悩を脱離して。清果を結ぶ。法師あり。西行上人高
 岸ある。神護國祇真言寺へ詣ると言え。支覚上人後身と呼
 集合。これ豫。西行の名をまき。彼ハ弓矢のめり。未だ一
 知和秋。紛らじ。虚名を高き。賣僧あり。這奴り。未だ一
 まうち殺さ。その唯悔を。支覚西行と面あり。却
 及。その出塵の高き。感伏。忽地。怨敵の心を轉。却
 られを稱。噴。その悪。成道正覺を

至て。彼も一時。是も一時。あり。仁俠をの。稱
 られて。德行。支覚の生。その母。羽の。秋。入。夢
 て。厚。又。証。後。出。有
 る。高尾。文。名。高尾。名。高。法
 その。渡。何。強。女。密。夫。悪。名。雪
 り。袈裟。御。前。盡。遠。殺。何。淫。婦。失。節。の。話
 名。雪。び。げ。生。延。道。を。死。て。名。世。の。袈
 袈。命。を。惜。し。を。死。て。名。世。の。袈
 け。い。ひ。ひ。被。是。を。入。れ。も。衆。皆。是。非。を。定。り。て。只。官。數。息。を
 第 十二 九尾の狐の求衣
 さん。若。即。の。袈。被。が。恋。と。益。常。の。物。が。り。又。席。上。更。よ。肅。然。の。の。く

耳を側はく。いとも愛したる衣と。圓坐する夜に綾綿は。まじりてうらや
 折れ。忽ち出来る五衣。蘭奢の薫り微妙くて。是より又さあね。袷被
 り。二の町よりうねべし。されやうぐれの后町を。同んも。忍しりれば。
 まりうち。観てわたり。當り伴の五衣。上坐し推坐す。これ玉藻
 が物なり。あて世俗よりあられたる。金毛玉面九尾の狐の衣。よとと
 八衆皆ふ。びとえやうえて。さうもゆぬ。玉をひらぬ。身ハ官女の常
 被る。五衣とり。入り。あつん。衣と名告め。いり。あつん。あつん。あつん。
 あり疑り。理。あつん。世の小説。近衛院の女官と化玉藻前と呼
 び。九尾の狐と。入り。原。土より。あつん。あつん。あつん。
 彼が表と名け。その小説の本を。あつん。あつん。あつん。あつん。
 とも。彼玉藻前と。入り。あつん。あつん。あつん。あつん。

あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 みて。下学集巻の中。犬追物の注。昔西域は班足王の。あつん。
 その夫人悪産人。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 國は出生。周の幽王の后。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 人を傷。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 時俗。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 白狐。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 立。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 の那須野原。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 聽。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。
 是。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。あつん。

自序の事。後花園帝の御宇。將軍義政公。幼少の時。當り。その
 古老の口号。は聽とられ。その小説の由。また久し。推とる。事のころ
 を推量する。七十四代の帝。鳥羽院の美福門院を寵さる。そのあはれ。
 内外のゆるみ。後宮の進退。より。あひく。世の機も。多く。人
 の恨も。深じて。終る。保元の播乱。と。あり。ぬ。それらの。こと。と。近衛
 院の宮嬪。玉藻前。といふ。妖怪を作。て。殺す。あり。ぬ。又。鳥羽院の。あ。時
 と。あ。り。ど。し。近衛院の久壽の比。小。せ。り。あり。ぬ。故。と。い。ふ。と。られ。ぬ。
 又。本。づ。つ。あり。保元物語。卷の。小。保。延。五。年。五。月。十。八。日。美。福。門。院。の。名。得。子。贈。丸。長。實。女。御。腹。小。白。皇子。御。誕生。あり。く。上。皇。鳥。羽。院。御。即位。思。召。て。何。れ。春。宮。子。立。の。小。永。治。元。年。十。二。月。七。日。三。歳。ま。く。御。即位。あり。依。り。先。帝。崇。徳。を。新。院。と。ぞ。す。ら。る。云。云。あり。依。り。久。壽。二。年。夏。

のころ。近衛院御。悩。を。り。ま。し。く。七月。の。旬。あり。ぬ。や。鳴。也。れ。以。事。
 小。清。涼。殿。の。夜。の。間。に。は。し。り。終。る。七。月。廿。三。日。小。隱。れ。さ。る。あ。り。ぬ。年。
 十七。近。衛。院。と。れ。る。新。院。の。時。を。は。ら。る。身。を。位。に。復。つ。ご。とも。
 重。仁。親。王。の。一。定。今。度。の。位。に。即。せ。あ。り。ぬ。と。約。ま。さ。る。を。り。ま。し。く。天。下。の
 の。諸。人。も。さ。り。あ。り。ぬ。思。の。外。に。美。福。門。院。の。計。ひ。も。後。白。河。院
 の。時。の。四。の。宮。と。さ。ら。る。を。御。位。に。即。ち。り。
 高。れ。も。銭。也。も。あ。り。ぬ。の。外。の。事。も。あ。り。ぬ。四。の。宮。も。故。待。賢。門。院。
 璋。子。推。口。納。言。藤。原。の。御。腹。ま。く。新。院。と。御。一。腹。あ。れ。ば。女。院。の。あ。り。ぬ。の。女。
 芳。子。継。あ。れ。ば。美。福。門。院。の。あ。り。ぬ。重。仁。親。王。の。位。に。即。せ。あ。り。ぬ。
 こと。を。猜。ま。ら。せ。あ。り。ぬ。の。宮。を。女。院。と。さ。る。進。ら。せ。あ。り。ぬ。は。皇。上。御。
 帝。も。内。に。す。ま。ま。あ。り。ぬ。の。故。に。近。衛。院。の。世。を。さ。り。ま。し。く。あ。り。ぬ。

新院兄誼しなりあかるとんやめりたる。これよりして。新院の根
 一は増らせあゆ理を。要を。まごあををよめべし。近衛院ハ美福
 門院の腹をて世を御とて十四年。あん年僅十七歳物の怪
 たりて。俄以崩さぬひね源三位頼政卿。勅令を宣て夜に
 南殿のうへ来て。呼るる妖怪を射りて。とていふ。この帝のあ
 時。平家物語。とゆえなれば。序に九尾の老狐が。玉藻前と
 いふ女官に化して。帝を悩ませり。小陰陽頭加茂保親。小あふ
 されて。下野國那須郡へ赴き。去々を三浦女。明上徳女。廣常と仰す。
 狩らせぬ。小狐の脱りて。遂に化して石となり。その後源公頼和
 尚。下野に赴けり。狐の化して。殺生石を。獲りたり。といふ。唐山よも。
 其石。望夫石。あんと。あふれ。化石の。と。といふ。より。物も。成。と。

格説は狐
 の化るとい
 藤原のけい
 とのひ又西
 陽雜俎
 狐をい
 だん北斗を
 持てるとい
 たりと云ふ
 周と云ふ玉
 眞と云ふ玉
 又人の生
 きてをい
 ふ化す

其當時の小説あれば。信とて。足らざり。證とて。足らざり。但巨石の怪を
 可とて。和漢よその例あり。ゆれば。件の殺生石も。砒石。砒石の類あり。毒
 石とて。鬼魅されし。と。あり。源頼朝の。徳に。ま。り。成。古今未生の玉藻
 前。が。る。附會せり。ま。け。く。ら。る。ぬ。ら。ぬ。と。い。と。ま。ん。や。も。あ。ま。の。こ。の
 一條の物語。うら。美福門院の。人。小比。眞と。作。設。に。ま。る。ん。さ。ん。が。當。初。の
 國の怪を。開。い。く。ん。周の。夜。奴。と。ま。る。る。が。唐山。演義の。書。に。殷の。紂王
 の寵妾。妲己。ハ。九尾の狐の化。たり。作。れ。る。を。え。て。後。あ。の。あ。も。も。褒姒
 を。妲己。と。白狐。と。九尾の。二。字。を。被。て。ら。れ。る。を。二。國。傳。末の。惡。狐。と。い。ふ
 る。夫。殷の。紂王の。時。より。我。朝。近。衛。帝の。あ。ん。時。に。至。り。抑。幾。千。載
 たり。和漢の。年代。あ。ま。り。よ。を。隔。し。ま。り。不。都。合。る。る。小説。と。や。り。な。ま。り。
 して。唐山の。書。藉。も。涉。痛。て。證。と。す。九尾の狐。ハ。瑞。獸。あり。い。つ。ま。い。

ゆふの矢を
つら小子のま
あられするま
のまの承

鎌倉
右大臣

妖神五藻



三浦及義明

まの書
の画図
ハモク
土重家の
るまは
かみま古
風まの
アまま
くま文
小西ま
るまの
とま

三浦の
西女
那須野
九風の
狐
村

上總及廣常



九尾狐の
物づくりに
又ちうら
それとま
別と種本
平しとて
繪本とて
のそと
のそと
のそと
のそと
のそと

野狐のひくく。人を盡惑し。人を残害するものあらんや。このよとりの夢
石雜志に載たれど。それより原本のまゝ引用したれば。漢文より。さむい
婦知のひよ。ぼえが。ん野のあ。べ。う。て。ゆ。び。鮮。中。ら。げ。て。あ。ふ。い。ん。
必しもあつ。と。ち。あ。つ。と。重。出。せ。り。ま。あ。ひ。ひ。ひ。を。呂。氏。春。秋。に。禹。の。身。の
二十う。て。い。ま。ご。娶。ら。り。と。塗。山。に。行。く。或。い。時。の。暮。て。嗣。を。失。ん。と。恐。る。
辞。し。て。い。ら。く。が。取。る。よ。必。後。あ。ら。ん。乃。白。狐。の。九。尾。あ。る。あ。り。て。禹。の。子。
と。り。小。至。り。禹。の。曰。白。狐。の。子。を。服。さ。り。九。尾。の。の。證。と。あ。ら。い。て。塗。山
の。人。務。て。い。ら。く。絞。く。た。る。白。狐。九。尾。麗。く。た。ま。家。室。に。成。て。我。都。悠。昌
あ。ら。ん。是。よ。あ。ら。く。塗。山。氏。の。女。を。娶。る。又。白。虎。通。り。狐。は。九。尾。あ。る。ま
何。も。狐。死。し。て。丘。を。首。と。て。本。を。忘。れ。ら。る。ま。り。て。危。を。忘。る。を。明。せ
る。必。九。尾。あ。ら。り。の。何。ぞ。九。尾。狐。の。所。を。ゆ。れ。ば。子。孫。絶。息。す。り。尾。は

か。の。何。ぞ。後。當。盛。る。べ。れ。を。明。さ。り。又。郭。璞。贊。小。青。丘。の。奇。獸。九
尾。の。狐。道。ある。と。る。の。翔。見。る。あ。れ。バ。列。書。を。銜。え。瑞。を。周。文。に。作。り。て
夷。齊。を。標。せ。と。又。王。褒。が。四。子。講。德。論。に。文。王。九。尾。の。狐。は。燕。と。東
夷。婦。に。周。武。王。白。魚。を。獲。て。諸。侯。同。辭。と。る。兩。條。の。潛。確。居。美。書
小。載。た。る。又。山。海。經。に。青。丘。の。山。は。獸。あ。る。と。の。状。狐。の。如。く。し。て。九。の。尾
あ。る。と。の。音。嬰。兒。の。と。う。く。人。を。食。ふ。と。れ。を。食。ふ。の。盡。さ。る。と。注。よ。その
肉。を。噉。へ。ん。と。て。妖。邪。の。氣。を。逢。さ。り。し。或。い。ら。く。盡。と。の。盡。毒。さ。り。
卷。の。一。又。同。書。に。青。丘。の。國。小。狐。の。九。尾。あ。る。と。り。左。平。あ。れ。則
は。出。づ。瑞。を。さ。る。と。り。卷。ノ。十。ら。れ。ら。尋。く。九。尾。の。狐。の。吉。瑞。を。奉。たり。但。山
海。經。の。一。説。は。青。丘。山。の。狐。は。く。人。を。食。ふ。と。れ。を。食。ふ。が。盡。され。と
あ。ら。し。用。て。和。漢。の。小。説。に。九。尾。の。狐。の。人。を。害。さ。る。と。を。作。出。す。致。さ。る。と。る

彼人を食ふといふもの九尾の狐ありとてその状狐の如くして
 九尾ありといふ又俗説は狐の肉を喰ふ所の彼は魅まじとて其
 中の餌まじとてあり山海経に所云九尾の狐の身を怪物とて
 其れ九尾の狐の増えたるのよありと古人の説ところ麒麟勿食
 天録にひくは瑞獸とて且白虎通に九尾の狐の九妃その所を
 子孫孫孫昌の惑とてありとて九尾の狐が宮嬪に化す二國は妖
 蕪一國を滅し人を害するをいひつゝその善惡吉凶の反覆を
 了虚実をいふのづからあるべし和漢の人情異なるをいひ奇を好
 不祥を唱ふのそ彼九尾の狐の瑞獸とてありとて孔聖獲麟の歎
 久いなる又狐は首九尾九ツつありとて山海経に身而の山は獸ありとて
 状狐のごくあり九尾九首虎の尻ありと名はけり蟹姪といふその音

嬰児の如しこれ人を食ふ巻ノ四 されらるる名ありといまむその實を
 らる奇獸ありされ九尾の狐といふものさへ流りてありあらば物も
 ありとて但九尾の馬の所見あり九尾の狐の管見あり東鑑建久四
 年七月廿四日横山権守時廣一疋の異馬を引る將軍頼朝を
 賢ありといふその是九尾あり前見ハ五ツ是所領冷路國分寺の辺に出
 の由去五月の比告あり依て怪れを召寄の言言上とて左近衛
 家景に仰ぎ陸奥國外濱に放さるべし云々同五年六月十日の條
 下に云横山権守時廣が獻する所の馬真勿一流遣は伴の男皇
 大進高家が家併途中に煩わりてそれを射殺したり緯則顯露
 身の早逐電り主人に仰ぎ尋ねる所の処近曾適れを召進
 びてんえたりされらる世話よの生をとりひきて過體狂弱不具の

類多をされを奇く損うといふも。規て亦竹の蓋うあらん本彼玉
 簾侍といふ所の小説あらう人まぢれり。只の小説は父母あつて
 考ど九尾の狐の瑞獸あらうとせらるるものあり。如く説く一作のこ
 せ。この折らう。遠寺の鐘声幽々鳴えて。八声の鷄も乱と啼見臺
 先生耳を側秋の夜のいと長かむ。今わく明するま近。止まんくと
 推禁れば妻が後さ諾らるる。天物の爪取剪。鎌倉時代の上下。
 米糞上人の食袋袋ホレいとあおもび先生は對ひ吾們的にさるもの
 よめらどといふがも。又あつてあなうもゆるど。あは明するの程あへき
 小どりのとされん。送憾しとらるるも。咳は見臺先生はもあひさ
 恨のさうりあれども。ある圓居をあらひ作せり。今骨みのを限るんか
 らは既よこの席より列るもの。欠米仙人が墮落の豈前行平の紀念の

鳥帽子狩衣。袷大尺が燈臺花山院の禪衣佐野源左衛門が漸離
 腹巻の餘の裳毛奉るま違あらど。縦名もあれ古夜するうも
 ちふとあらんあ。文吾が袴も。義太夫股引も。俄鯉夫の腰巾着も
 杉ぬ前の杖臺裏も。漏とづうハのり。と天も明といふのわひ。あ
 聖の夜を俟あといと叮嚀に説示ま。さる有理と答るる声とも
 ろとも。駭の燈燭忽地。一度滅く寂莫う。宝樹の奇異
 の思ひをあら。又聖の夜と契まら。是もさるま又憑るれば。滑り土庫
 の内より出。舊のどま蹟しは。ちぢり。附房小いふなり。

第一巻。友切丸の腰よひを。かひのりし。たが進書。我朝とつ。の。祐親道
 かひのり。うまをひ。男児の名。千鶴といふ。三歳とつ。春。祐親京都の在。番。果。て。る。果
 へ。は。あ。の。り。を。あ。り。て。た。れ。あ。る。事。は。源。平。盛。衰。紀。卷。下。
 ハ。は。を。さ。う。又。同。書。小。伊。東。九。郎。祐。兼。は。何。祐。清。祐。忠。祐。兼。同。人。異。名。也。い。ふ。や。う。

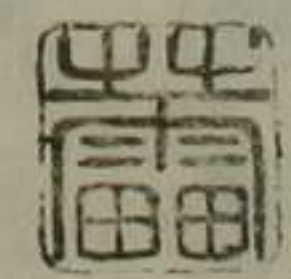
昔語質屋庫巻之五終

曲亭翁性耽著作嘗讀有用之書以筆于
無用之書其讀有用之書也若無用為其
為無用之書也若有用為莊子曰知無用
而始可與言用矣善哉言也翁善遊有無
則其書作意何淺之有是故事取凡近而
理較著閱則亦足以慰閑寂降睡魔况若
是編博學和漢故事以辨俗說虛錯却呈
之兒戲不自諱其論之高也或批之曰俗
說辨下出于諺草上予謂不然也設夫此

之蟠龍辨則難以為兄難以為弟但其詞
荒唐而以失實者有之故雖云味免君子
嗤笑其所發明亦足以醒蒙昧矣且仰述
千載之毒俯辨雅俗之殊似一目一耳所
親聞觀之非一朝一夕著述者是故言成
燈下之戲墨意有前史之所病豈不以其
所戲諛者小所論辨者大乎後世輕才諷
說之徒皆驚而其知不相及焉昔者于令
升撰集古今神祇人物變化名曰搜神記

劉惔稱之為鬼之董狐。今吾有取于其書。亦復稱翁為小說之董狐。請海內好事者。徒尤其文鄙陋。勿與世冗藉同日而論。文化七年庚午肇秋下澣。

江湖陳人魁蕾撰



鈴木武筭書



文榮堂發兌文房書目

考槃餘事

明中葉小書
東漢源謙校

白紙摺明朝錄
收入全部四冊

題畫詩選

岡崎虛門著

全仕立全三冊

書畫皆宜

吳燮氏撰輯

白紙摺明朝錄
收入全部三冊

題畫詩剛

森川竹庵著

全仕立全二冊

書舖

浪華志齋鐵應橋比第五街

前川游七郎



